

2021 年度後期 大学院授業改善のためのアンケート

<文学研究科長・専攻代表からのコメント>

■文学研究科長 土肥 伊都子

各専攻とも、大学院生からのアンケート回答からは、授業に関して特に問題はないという認識であった。そして改善に関しても具体的な提案事項はほとんどなかった。ただし、大学院生の人数が極めて少数であるために生じたアンケート結果であることは否めない。院生数の多い心理学専攻からは、授業内容に関する質問や要望への対応について改善の余地があると判断がされた。今年度は各教員がこの点に留意し、よりよい授業にしていくことを期待する。

■言語科学専攻代表 西垣内 泰介

(1)授業内容について

授業の内容については調査結果からはわかりにくいですが、全体に評価が高かった。

(2)授業の運営について

学生による発表、双方向のディスカッションなどについて評価が分かれているように見える。

(3)授業内容について

基本的には同じような内容の授業をつづけて行くのでよいと思われるが、知的な意欲のある学生が今後も受講してくれることを期待したい。

(4)授業の運営について

もっと双方向の授業のあり方が望ましいが、内容の専門性を考えると致し方ないと思われる部分もある。大学院においては、学生の知識だけにもとづいてディスカッションするより教員からの専門的な知識や学界の最先端の知見がインプットされる必要があるからである。

■英語学専攻代表 Philip Spaelti

提出された評価から判断すると、学生は提供されたクラスの質に概ね満足しているようである。特に注目すべきは、質問 (5)、(6)、(12) のスコアで、教師が生徒のニーズに十分に対応していることを示す高いスコアを獲得した点である。進行中の COVID-19 に起因する困難な状況を考えると、これは特によい傾向といえよう。現在、英語専攻の学生は 1 人しかいないため、この結果に対してどの程度の信頼性があるのかは不明である。ただし、

直接的なフィードバックも得られており、それはこの結果と一致しているようである。教員による自己評価も、学生のニーズに注意を払っていることを示している。今年度終わりには教員の1名が英語専攻を去る予定であるが、こうした傾向が今後も継続することが強く望まれる。なお、英語専攻では今年カリキュラムに大幅な変更を加えたため、今年評価されたクラスは次年度には開講されることはない。

■国語国文学専攻代表 黒木 邦彦

21年度後期は対面授業が基本と成った。教員、学生共に、従来の形式の方がやりやすいようである。資料等の提示も、授業によっては、対面でなければ難しい部分も有る。コンピューターの指導に関しては、web会議アプリ等で画面を共有しながら進める方が学生にも分かり良いので、授業回によっては、対面であっても、コンピューターを介して授業を行なった教員も有る。授業内容に関しては、学生の学力や関心を鑑み、基本知識の教授を重視した。同時に、自ら問題を発見し、主体的に考える力も養うよう努めた。問題は、学生の学力差が激しいことである。基礎知識の教授だけでなく、個々人に合わせた指導、たとえば、学習習慣の植え付けや、比較的容易な目標設定なども求められる。授業の水準を保つことに教員が苦勞している様子もアンケートからは読み取れる。

■心理学専攻代表 大和田 攝子

心理学専攻では、ほとんどの科目で感染防止対策を講じながら対面授業が実施された。各授業担当者の自己点検・評価からは、例年に比べて受講生が少ない中で、受講生に過度な負担がかからないよう配慮しつつも、一人一人の理解度に応じて柔軟に授業を運営してきたことが伺われた。また、授業アンケートの結果から、これらの授業に対して概ね高い評価が得られており、有意義であると感じる大学院生が大半を占めた。

その一方、「授業内容に関する質問や要望に、すみやかに応じてもらった」という項目に対して、少数ではあるが否定的な回答がみられた。今回の授業アンケートからその詳細は明らかではないが、各授業担当者はこの点についてより一層の注意や改善が必要である。